

```

#####
;# シミュレータコマンド(マクロ)サンプル 【v1.2.3】
;# Date : 2012/08/03
;# UpDate : 2014/06/13
;# UpDate : 2014/11/04(バージョン番号変更のみ/内容変更なし)
;#
;# Copyright(c) 2012-2014 GAI0 TECHNOLOGY CO., LTD. All Rights Reserved
#####
; スタートアップコマンドファイルに記述できるコマンドの規格、解説については、下記からご確認下さい。
; [ヘルプ]→[シミュレータマニュアル]→[目次]→[デバッグ]→[コマンド/メッセージ]→[SystemG]→[デバッグコマンド一覧]
; [コマンドの規格] / [コマンド解説]
; 「:」以降の記述はコメントとして扱う事ができます
-----
start log/all ; ユーザがコマンドウィンドウから実行したデバッグコマンド
; ; ドおよびウィンドウに表示されるすべてのデータをログフ
; ; アイルへ書き込みます
; ; シュミレーション実行後のログファイルは、カバレッジマ
; ; スターのテストプロジェクトフォルダに「systemg.log」の
; ; 名称で保存されます
-----
on error then continue ; マクロ実行中にエラーが生じたときにGOコマンドとSTEPコ
; ; マンドの次のデバッグコマンドを実行します
-----
set unit/all ; すべてのユニットについて、シンボル情報を設定するよう
; ; に指定します
-----
@reset ; リセット状態にします(パワーオンリセット)
-----
; ; 下記 assign コマンドを使って、実機と同様のメモリレイアウトにする事が可能です
; ; assignコマンドの代わりに、「起動設定」画面の「全てのメモリ領域をアサイン」のチェックをONにする事で、選択したMPUの全領
; ; 域をread/write/execの属性にします
assign/read/write 0x04000000:0x04ffffff ; メモリのアサインを行います
-----
;set reg pc = 0xfffffff ; プログラムカウンタを設定します
-----
;set mode source ; ソースウィンドウにソースファイルを表
; ; 示します
-----
;set trace/subroutine=yes/display ; プログラムの実行トレースを実施します
; ; ログファイルにも保存されます
-----
;set output/message=all none ; すべてのレベルのメッセージに対して、ログファイル/ウィ
; ; ンドウに出力しません
-----
;set output/command nowindow ; デバッグコマンドをウィンドウへ出力しません
-----
; 対象関数 : main.c : Sample_Infinite_loop
; 指定アドレス (IRQ_COUNT)が読み込まれた時(17行目)に値を書き換えてwhile文を抜ける
;
define/address/global ADR_ADIF = 0x04000000 ; ADR_ADIFはマクロで使用する任意の変数名
define/global COUNT = 0 ; COUNTはマクロで使用する任意の変数名
-----
; マクロ : 01_1.w_adif
macro w_adif ; マクロ名は任意で設定
define/global COUNT = COUNT + 1
IF COUNT < 2 THEN goto func_end

; 2回目にマクロが実行されると値のセットを行う
; 必要が無ければ、回数カウンタの処理は入れないでも良いです
store ADR_ADIF = 1
define/global COUNT = 0

func_end: ; ラベル名は任意で設定
mend
; IRQ_COUNT (0x04000000)が読み込まれた時にマクロ(w_adif)を実行する
set do/read=0x04000000 w_adif
-----
; 対象関数 : main.c : Sample_Infinite_loop
; 無限ループの処理(23行目)を強制的に抜ける(PC変更)
;
; マクロ : 01_2.pass
macro pass ; マクロ名は任意で設定
set reg pc = main%#33
mend
; main.c の 30行目に展開されるマシンコードの1バイト目が実行された時に
; マクロ(pass)を実行する
set do/exec=main%#30#1 pass
-----
; 対象関数 : main.c : Sample_AutoVariables_Evacuation
; Auto変数の値をGlobal変数に退避して、テスト結果CSVに保存する
; ※Auto変数の変遷等をテスト結果CSVなどで使用したい場合に使用します。
; マイコンに依っては、Auto変数をそのまま利用できない場合もあります。
-----

```

```

; マクロ : 02_1.mymacro
macro mymacro                                ; マクロ名は任意で設定
; プログラムで定義されている変数(Macro_Symbol)にAuto変数(InfoPtr[0].value_a)の値を設定する
STORE/Synchronize Macro_Symbol= InfoPtr[0].value_a
mend
; main.c の 50行目に展開されるマシンコードの1バイト目が実行された時に
; マクロ (mymacro) を実行する
set do/exec=main¥#50#1 mymacro

; マクロ : 02_2.mymacro2
macro mymacro2                                ; マクロ名は任意で設定
; プログラムで定義されている変数(Macro_Symbol2)にAuto変数(InfoPtr[0].value_a)の値を設定する
STORE/Synchronize Macro_Symbol2= InfoPtr[0].value_a
mend
; main.c の 54行目に展開されるマシンコードの1バイト目が実行された時に
; マクロ (mymacro2) を実行する
set do/exec=main¥#54#1 mymacro2
;-----
; 対象関数 : main.c : Sample_Register_Evacuation
; Registerの値をGlobal変数に退避して、テスト結果CSVに保存する
; ※Registerの変遷等をテスト結果CSVなどで使用したい場合に使用します。
; 使用出来るレジスタ名はマイコンによって異なりますので、下記からご確認ください。
; [ヘルプ]→[シミュレータマニュアル]→[目次]→[プロセッサモデル固有の仕様]→[SystemG]→[～プロセッサモデル]
; →「アドレス空間・レジスタ」→「レジスタ」
;-----
; マクロ : 03_1.b_reg
macro b_reg                                    ; マクロ名は任意で設定
; プログラムで定義されている変数(Before_Register)にR1レジスタの値を設定する
STORE/Synchronize Before_Register= %R1
mend
; main.c の 63行目に展開されるマシンコードの1バイト目が実行された時に
; マクロ (b_reg) を実行する
set do/exec=main¥#63#1 b_reg

; マクロ : 03_2.a_reg
macro a_reg                                    ; マクロ名は任意で設定
; プログラムで定義されている変数(After_Register)にR1レジスタの値を設定する
STORE/Synchronize After_Register= %R1
mend
; main.c の 71行目に展開されるマシンコードの1バイト目が実行された時に
; マクロ (a_reg) を実行する
set do/exec=main¥#71#1 a_reg
;-----
; 対象関数 : main.c : Sample_Global_Set
; テストCSVで設定した変数がソースコードで書き換えられる前に退避(A)して、書き換えられた後に
; (A)の値を変数に戻す
; ※テストCSVで入力したデータを確認したい場合に使用します。
;-----
; マクロ : 04_1.Evacuation_Variables
define/Global Evacuation = 0                  ; Evacuationはマクロで使用する任意の変数名
macro Evacuation_Variables                    ; マクロ名は任意で設定
; プログラムで定義されている変数(GlobalA)の値をEvacuationに設定する
define/Global Evacuation = GlobalA
mend
; main.c の 79行目に展開されるマシンコードの1バイト目が実行された時に
; マクロ (Evacuation_Variables) を実行する
set do/exec=main¥#79#1 Evacuation_Variables

; マクロ : 04_2.Set_Variables
macro Set_Variables                            ; マクロ名は任意で設定
; Evacuationの値をプログラムで定義されている変数(GlobalA)に設定する
store GlobalA = Evacuation
mend
; main.c の 82行目に展開されるマシンコードの1バイト目が実行された時に
; マクロ (Set_Variables) を実行する
set do/exec=main¥#82#1 Set_Variables
;-----
; 対象関数 : main.c : Sample_AutoVariables_Set
; グローバル変数の値をAuto変数に設定する。
;-----
; マクロ : 05_1.Set_AutoVariables
macro Set_AutoVariables                        ; マクロ名は任意で設定
; プログラムで定義されている変数(Auto_Symbol)の値をAuto変数(InfoPtr[0].value_a)に設定する
STORE/Synchronize InfoPtr[0].value_a = Auto_Symbol
mend
; main.c の 50行目に展開されるマシンコードの1バイト目が実行された時に
; マクロ (mymacro) を実行する
set do/exec=main¥#103#1 Set_AutoVariables
;-----
; 特定範囲のメモリ内容を、初期化する
; 書式 mem_set 初期化開始アドレス, 初期化終了アドレス
; ex) メモリ0x2000～0x3000番地の内容を0FFhで初期化する

```

```

-----
macro mem_set st_adr/address, ed_adr/address          ; マクロ名は任意で設定
define/addr AD1 = st_adr                            ; AD1はマクロで使用する任意の変数名
loop:                                                ; ラベル名は任意で設定
  if AD1 == ed_adr then goto loop_end
  store/loc=1 AD1 = 0xFF      ; 初期化したい値を設定します
  define/addr AD1 = AD1+1
  goto loop
loop_end:                                           ; ラベル名は任意で設定
mend
; 無条件にマクロ(mem_set)を実行する
; 指定される範囲を書き込み可能にしておく必要があります
; mem_set 0x2000, 0x3000
-----
; 特定範囲のメモリ内容を、特定範囲のメモリにコピーする
; 書式 md_set コピー元開始アドレス, コピー元終了アドレス, コピー先開始アドレス, コピー先終了アドレス
; ex) メモリ0x2000~0x3000番地の内容を0xff2000~0xff3000番地へコピーする
-----
; 指定したメモリ内容をファイルに保存する
; 書式 op_rd 開始アドレス, 終了アドレス
; ex) op_rd 0x2000, 0x3000
macro op_rd $p1/address, $p2/address                ; マクロ名は任意で設定
open/write/dump mfp mr_file.dat
assign $p1:$p2
write mfp $p1:$p2
close mfp
mend
; ファイル内容を指定したメモリに保存(コピー)する
; 書式 op_rd 開始アドレス, 終了アドレス
; ex) op_rd 0x2000, 0x3000
macro op_wd $p1/address, $p2/address                ; マクロ名は任意で設定
open/read mfp mr_file.dat
assign $p1:$p2 ; 読み込み専用でマッピング
read mfp $p1:$p2
close mfp
assign /read $p1:$p2 ; 読み込み専用で再度マッピング
mend

macro md_set $p1/address, $p2/address, $p3/address, $p4/address ; マクロ名は任意で設定
  op_rd $p1, $p2
  op_wd $p3, $p4
mend
; 無条件にマクロ(md_set)を実行する
; md_set 0xff4000, 0xffffffff, 0x004000, 0x00ffff
-----
; マクロまたはコマンドプロシジャ内から実行される各デバッグコマンドをシミュレータのコマンドウィンドウに表示するようにし
; ます(SET VERIFYコマンドより後のコマンドから表示します)
; SET VERIFY
-----

```